

一遍上人と戒律

藤 島 達 朗

淨土教成立の根本要因は、人間劣機の自覺にある。従つて所謂聖道諸門と淨土教諸流の、基本的な立場の相違は、其の戒律觀にあると言つて過言でない。以下述べやうとすることは、右の如き見地より、日本淨土教の最後に成立した時宗、即ち一遍上人の宗教に於ける戒律觀を見、以て我國淨土教發展史上の時宗の位置を考へやうとするにある。

一

上人に於ける戒律を語らうとするには、必然的に先づ其の教義にふれなければならぬ譯であるが、一言にして言へば直に南無阿彌陀佛を稱するのみと云ふ、まことに簡明直截なものである。『一代の聖教皆つきて南無阿彌陀佛になりはてぬ』は、上人の臨末の言葉として殊に有名であるが、この南無阿彌陀佛は、『善惡の二道は機の品なり、顛倒虛妄の法なり、名號は善惡の二機を攝する眞

實の法』(一遍上人語錄卷下)であり、『たとへば火を物につけん、心にはなやきそとおもひ、口にはなやきそといふとも、此詞にもよらず、念力にもよらず、たゞ火のをのれの徳として物をやくなり、水の物をぬらすもおなじ事なり、さのごとく名號も、をのれなりと往生の功德をもちた』(同上)る所のものである。

この善惡の二機を攝する眞實の法であり、それ自身として往生の功德を具する南無阿彌陀佛を、如何にもてなすかに就いては次の如く言ふ。

『皆人の南無阿彌陀佛をこゝろえて往生すべきやうに思へり、甚謂れなき事なり、六識凡情をもて思量すべき法にあらす、但し領解すといふは領解すべき法にあらずと意得るなり、』(語錄卷下)

『念佛は安心して申も、安心せずして申も、他力超世の本願にたがふ事なし、彌陀の本願に缺たる事もなくあまれることもなし、此外にさのみ何事をか用心して

申べき、たゞ愚なる者の心に立かへりて念佛すべし、』

（語錄卷上、興願僧部への返事）

『名號は信するも信ぜざるも、となふれば他方不思議の力にて往生す、自力我執の心をもて兎角もてあつかふべからず、極樂は無我の土なるが故に我執をもては往生せず、名號をもて往生すべきなり』（語錄卷下）

眞實の法であり、凡愚の思量すべからざる功德を持つ名號である故に、其稱名の態度、心構へには何の關係もなく、たゞ稱へさへすれば超世の本願にかなひ、他方不思議の力にて往生するとなすのである。

『往生はまたく義によらず、名號によるなり、法師が勸る名號を信じたるは往生せじと心にはおもふとも、念佛だに申さば往生すべし、いかなるゑせ義を口にいふとも心におもふとも、名號は義によらず心によらざる法なれば、稱すればかならず往生するぞと信じたるなり』（語錄卷下）

『三經ならびに一代の所詮たゞ念佛にあり、聖教といふは此念佛を教たるなり、かくのごとくしりなば、萬事をして、念佛申べき所に、或は學問にいとまをいれて念佛せず、或は聖教をば執じて稱名せざるは、いたづらに他の財をかぞふるがごとし、金千兩まるらする

といふ券契持ながら、金をば取らざるがごとし』

（語錄卷下）

すべてのばかりを捨てあらゆる執着を離れ、たゞ念佛を稱ふる事に依り、彼土へ往生すると説く。まことに純一無雜な信仰態度である。

二祖他阿上人が、珠阿に與へた手紙の中に、師上人は信不信、淨不淨を問はず稱名すべしとの善導和尚の素意を伺つてこの義を立てられたが、この語、この義に執すれば又往生に益ある事でないと云つてゐる。まこと一代の聖教も、一切の經典も、祖師一遍上人は無論三國相承の諸師達の金言も、南無阿彌陀佛一つに約され、南無阿彌陀佛たゞ一つのみのこされてよいのである。

二

以上の如き全一的な立場から、次に出て來る問題は、此の如き念佛を稱ふる工夫であらう。稱ふる事に依つてのみ可能であれば、従つて其の後の全體的努力は、其の稱ふる事に拂はれねばならぬ。即ち念佛するに最もよき状態を常に持する事である。

上人従つて時宗の戒律は、此の所に出現するのである。即ち念佛する爲の戒である。諸々の戒律を具する事

に依つて、最もよく稱名の實を上げ得る爲の戒である。

播州問答第十一章中に、上人は念佛の機に三品ありと云ひ、其上根は、妻子を帶し、家に在りながら、これに執着せずして往生する。中根は妻子は捨てるが、住處と衣食とを帶し、しかもこれに執着せずして往生する、最後に下根のものは、すべての縁を捨離せねば不可能である。我等は正しくこの下根のものなれば、一切を捨てねば命終の時必ずこれに執着して往生を損ずる。故にすべての繫縛を離れ、ひたすら念佛せねばならぬ、と云はれてゐる。

かくて

『わろしと知りながらいよ／＼著してこゝろやすくはぐくみたてんとて、財寶妻子をもとめて、酒肉五辛をもてやしなふことは、忍せものと知りたるかひなし、わろきものはすみやかにすつるにはしかず』(語録卷下)と云ひ

『上人は身命を山野に捨て、居住を風雲にまかせ、機縁に隨て徒衆を領したまふといへども、心に諸縁を遠離し、身に一塵をもたくはへず、絹帛の類を膚にふれず、金銀の具を手にとり取事なく、酒肉五辛をたちて十重の戒珠をみがきたまへり』(語録卷下)

と述べる如き嚴肅な守戒の生活を續けられたのである。蓋しこれ純一なる念佛は、すべての執着をはなれ、あらゆるものを捨てはた上にごを現るゝとなすが故である。所謂「捨聖」の面目がこゝにある。

平安末期に於いて、既成教團の腐敗を厭ひ、眞摯な修道生活に志して熱心な宗教的信仰を求めた人々に、持經者、聖、沙彌の三者があつた事は、既に説かるゝ所であるが、この中沙彌が在家生活を基調としたに反し、持經者、聖の三群は宗教的行を主とするものであるが故に、その生活は、最も嚴肅な戒律主義に則つたのである。

淨土門の先達法然上人は、其生活最も戒律的であつたが、上人こそは正しくこの聖の系統に出で、従つて上人に基を發する淨土の諸流は、悉くこの様相をとる所である。西山證空上人の門、聖達の會下にあつた一遍上人がこの埒外にある筈のないのは當然である。

三

個人としての此の如き戒律的な生活は、同じい意味が擴充されて、團體としても同様に形成される。

『法師のあととは跡なきを跡とす』(語録卷下) いひ、其聖教悉くを焚かした上人に、立教開宗の意志は恐らく

なかつたであらうが、其全國遊行の間、上人に隨從して弟子の禮を取るものは、次第に多く、一遍聖繪十二に依れば、其晩年一千餘人を數へたと云ふが、其數は兎も角、上人の身邊に多くの僧尼の常隨した事は、疑ひない事であり、これがそのまゝ、一つの團體を形成して行つた。所謂時衆がこれである。一つの團體が出来れば個人の戒の上に、更に團體としての規範が要求される。歸命戒は、入團に當つての誓戒であり、時衆制誡は一般的な教團規約である。以下二祖の道場制文、三祖の知心修養記、七祖の他阿同行用心大綱註、解阿の防非鈔等すべてこれこの精神を強調するものに外ならぬのである。

四

さて此處迄來て、所謂日本淨土教の發展を一瞥せねばならぬ。

由來、我國に於ける淨土教の萌芽は、既に奈良朝にあるが、事實確乎たる自覺の下に打出されて來るのは源信和尚からであり、更に明かに寓宗の地位を去つて獨立の旗幟を翻すのは、言ふ迄もなく法然上人からである。

往生要集の劈頭に於て『夫往生極樂之教行濁世末代目足也』と叫んだ源信和尚の末世的自覺こそは、まことに

一遍上人と戒律(藤島)

五濁末世の凡夫得脫の途を開ける最初の光であつた。この末世の自覺即ち凡夫の自覺は、『當今末法是五濁惡世、唯有淨土一門可通入路』の法然上人にいてよく明瞭となつた。即ち淨土の一門こそは濁世末代の凡夫に残された唯一の途であると云ふ。末世に目ざめ、凡夫の真相に目ざめた時、いづれの教行も及ばず、唯念佛の一道のみよく我等を救ふといふこの立場、この立場は、凡夫の真相、人間の眞實相を認めた上に、築かれた所のものである。即ちいづれの教も、行も及ばず、あらゆる戒律も行はれぬ醜惡な人間性の上に、見出された念佛の一路である。即ち念佛がこの末世の自覺、凡夫の自覺の上に見出されたものである以上、念佛と戒律思想とは、飽く迄對蹠的な立場を持せねばならぬ。

換言せば念佛の立場よりは、戒律思想は抛擲せられねばならぬ。これが凡夫的、人間的自覺に基を發する日本淨土教の自然なる進展過程となすべきではあるまいか。

この見地から法然上人の戒律を認むる如き態度は、如何に考へらるゝであらうか。末法の世、戒律の保持がすべての點にて不可能なるを信じ、無學者、惡人等すべての人類を救濟すべき大願の下に唱へ出された念佛の一門が、戒と念佛の二つを共に認むる態度を持す事は矛盾で

ある。矛盾のみに止まらず、明らかに自らの立脚地を、自身で覆へすものと言ふべきであらう。これこそは單に新舊合した過渡的な立場である。先驅者法然上人には、かくて飽く迄過渡的な存在としての意味を見出さねばならぬのであらう。

而して如上の最も徹底した立場を取るのが親鸞聖人であると言ふ迄もない。戒律より開放し、出家たるを抛擲した在家人の宗教は、かくて日本淨土教の眞なる立場を正しく進めたものとして、その總結となさねばならぬ。

さて一遍上人の宗教であるが、上述する如くこの立場に立つ限り法然上人と全く同じく、時代的に最もおそく成立した淨土の一門であるけれども思想的には、親鸞聖人の眞宗以前に置かねばならぬと思考されるのである。

五

以上は戒律を中心とした所論であるが、時宗がもつ、日本淨土教として最も特異な點は、我國神祇との交渉にある。其の念佛は神勅念佛と云ひ、神勅相承と稱して、立教の基礎と此處に置く。

語録卷下に云ふ、

「我法門は熊野權現夢想の口傳なり、年來淨土の法門

を十二年まで學せしに、すべて意樂をならひうしなはず、しかるを熊野參籠の時御示にいはいはく、心品のさはくり有べからず、此心はよき時もあしき時も迷なる故に、出離の要とはならず、南無阿彌陀佛が往生するなり」

時正に本地垂迹説の完成期であり、日本淨土教は、これに至つて完全に我國神祇との結合を成したと見られる。この意味から時宗の成立は、淨土教の我國に於ける發展史上、特に注目さるべきものであり、一遍上人の宗教の思想的興味も、亦かゝつてこゝにあるのであるが、この點に關しては、他日題を改め、稿を別にして論じやうと思ふ。